

【立花英裕先生追悼特集】

「ここ」と「よそ」、場所に関する若干の考察  
—キム・チュイ、ダニー・ラフェリエール、  
イヴ・ボヌフォワの場合—

Quelques réflexions sur les lieux :  
Kim Thúy, Dany Laferrière et Yves Bonnefoy

小倉 和子  
OGURA Kazuko

はじめに

フランスの現代詩人イヴ・ボヌフォワ (Yves Bonnefoy, 1923-2016) は、場所に関する省察の書『奥の国』の冒頭で、「十字路で、わたしはよく不安を感じたものだ」と述べている。そして、こう続ける。「そんなとき、その場所、あるいはほぼその場所、すなわちわたしが選ばずにすでに遠ざかっているその道をほんの少し行ったところに、そう、より高次な本質の国が開いていたのだと感じる。わたしはそこに行って生きることもできたはずなのに、それを失ってしまった。しかし、選択の瞬間には、このもう1本の道を行くべきだとわたしに教えるものはなかったし、そうほのめかすものさえなかった」(Bonnefoy, 1972, p. 9) と。このようにして、「現前の詩人」と呼ばれるボヌフォワは、「よそ」にたいするきわめて強い誘惑を感じながらも、「今、ここ」に断固として留まる決意をするのである。

ところで、古今東西、「ここ」を離れて「よそ」で生き延びなければならなかった作家は少なくない。フランスならば、チェコ出身のミラン・クンデラ (Milan Kundera, 1929-) や中国出身のガオ・シンジェン (高行健, 1940-)、ソ連出身のアンドレイ・マキーン (Andrei Makine, 1957-) などがすぐに思い浮かぶが、カナダ・ケベック州にも移住作家は多い。ハイチ出身のダニー・ラフェリエール (Dany Laferrière, 1953-) がモンレアルにやって来たのは1976年だった。ヴェトナム出身のキム・チュイ (Kim Thúy, 1968-) も、ほぼ同時

期の1978年に10歳でボートピープルとして、モンレアルから東に約50kmの町グランビーに到着している。

ここでケベックにおける移住作家たちの長いリストを広げることは差し控えたい。1980年代以降の彼らの目覚ましい活躍ぶりはすでに繰り返し紹介されてきた通りである<sup>1</sup>。ここでは、ダニー・ラフェリエールやキム・チュイにとっては、ボヌフォワの場合とは異なり、「ここに留まる」という選択肢がなかったことだけを指摘しておこう。ハイチでジャーナリストをしていたダニー・ラフェリエールは、ジャン＝クロード・デュヴァリエ (Jean-Claude Duvalier, 1951-2014) による独裁政権下で<sup>トントン・マクート</sup>秘密警察から命を狙われていた。キム・チュイも、南ヴェトナムのサイゴンで生まれてまもなく、広い自宅の半分が北の共産軍に占拠される。どちらも、一刻も早く逃げなければならなかった。しかし、どこへ逃げるのができただろう？

2人が向かった先はケベック州だったが、これには偶然の要素も少なからず関係していた。ラフェリエールは母親が急遽用意してくれた仮のパスポートを携えて、1976年、オリンピック開催中のモンレアルに到着する。キム・チュイも、フランスの代表団が去った後のマレーシアの難民キャンプで母親がフランス語圏からの代表団の通訳をしていたことが幸いしてケベック州への受け入れが決まり、一家でグランビーに落ち着くことになる。これらの町はその後、彼／彼女にとって「ここ」となったのだろうか。出身国とホスト社会とのあいだで、彼／彼女はどのように自らを位置づけたのだろうか。

イヴ・ボヌフォワとは別の意味で「ここ」と「よそ」に関する問いが発せられるのはまさにこのときである。この問いの歴史は長い。ネの指摘を俟つまでもなく、プラトン (Platon, 前427-前347) は物質界と「イデア」界を対比させたし (Née, 2009, p. 472)、キリスト教をはじめとする多くの宗教が「彼方」や「天上」の世界を発見した。また、そこまで遡らずとも、大航海時代がさかんに追い求めたのも「よそ」であり、さらに近代においては、市民革命によって亡命を余儀なくされた貴族たちと公共交通機関の発達とが相俟って生まれたロマン主義が問うたものでもある<sup>2</sup>。したがって、われわれがここで取り上げようとしているのは、「ここ」と「よそ」のあいだで「真の場所」<sup>3</sup>を見出すための壮大な問いの一端であるが、本稿ではあくまで3人の作家たちに限定して考察したい。

## 1. キム・チュイにとってのヴェトナムとグランビー

まずはキム・チュイ。彼女の最初の作品のタイトルは *Ru* である。この語は古いフランス語で「小川」あるいは「(涙、血、お金などの) 流れ」を意味し、ヴェトナム語では「子守歌」、「揺り椅子」などの意味をもつ<sup>4</sup>。未来の作家が体験した、困難であると同時に甘美な体験を見事に要約する題名である。この作品において、著者の分身ともいえる話者は、まずはヴェトナムで、その後マレーシアの難民キャンプで、そしてグランビーに到着してから体験したことをユーモアあふれる文体で回想している。

10歳の少女が壮絶な体験を経て辿り着いたグランビーは、幸福の場所そのものだった。

わたしは、自分たちを歓迎するこの聞き慣れない音色の言葉と、色とりどりのカナッペやオードヴルや一口パイが並べられたテーブルの上に立つ氷の彫刻の大きさに圧倒されていた。どの料理も知らなかったが、そこが歓喜の場所であり、夢の国であることは知っていた。(R18)

グランビーの住人たちは難民を暖かく迎え、彼らの定住を助けてくれた。彼らを蚤の市に連れていき、ベッド、マットレス、食器類などの必需品を買いそろえるのを手伝ったり (R34)、こぞって自宅での昼食に招待しようとした。言葉が分からず、わざわざ買ってきてくれたクイックライスがヴェトナムで食べていたものとは似ても似つかぬポロポロの長粒米で、どうやってナイフとフォークで食べたらよいか分からなくても (R31)、グランビーは少女にとって「揺り椅子」(R142) となり、「地上の楽園」(R35) となった。

とはいえ、アジア系の娘が何の葛藤もなしに西欧的価値観が支配する新天地で自己形成できたわけではない。彼女は母親から教えられたヴェトナム文化と、より開放的な北米のライフスタイルとの狭間で自分探しをしながら成長することになる。

その彼女が真の自分自身を見つけたのは、いったん母国に戻ることでではなかっただろうか。2016年に発表された小説『ヴィという少女』の話者バオ・ヴィ<sup>5</sup>は、モンREAL大学の法学部を卒業して弁護士事務所研修をしているときに、ヴェトナムのドイモイ政策に関する長期支援プロジェクトに参加するためにハノイに赴く。当初、彼女は失われた時間を取り戻す

べく「すべてを見、すべてを学びたいと願う」(V102; V 訳 113)。しかし、じっさいには、通りにあふれる自転車や傷痍軍人が売る宝くじ、靴磨きの少年の横を通り過ぎる新興富裕層たちの車、駐在員や外国人観光客たちが発する心ない言葉などを見聞きするうちに、複雑な思いから逃れようと仕事に熱中することになる。外交官や国際機関で働く人々と出会う機会も多く、そのうちの1人であるヴァンサンという鳥類に詳しい生態学者と親しくなる。「国境など気にも留めず、ある地域から別の地域へと移住する」(V119; V 訳 133) このフランス人男性と交際するうちに、自分の身体にも翼が生えてきたような気がして (V121)、マンハッタン、オタワ、上海、ボストン、ベルリン、カンボジア、ロンドン、コーンウォール、ビルマ、シンガポールなど、世界各地を訪ねるようになる。こうして彼女は、グローバル化の時代にふさわしい新しいタイプの放浪者の仲間入りをし、より曖昧だが、軽やかなアイデンティティを獲得する。

むろん、一人称小説だからといって、作中人物の体験と作家自身の体験を同一視することはできないが、『小川』の主人公同様、ヴィにも、キム・チュイ自身が少なからず投影されていることは間違いない。今日では作家として各国に講演旅行に出かけているキム・チュイは来日時の講演で次のように語っている。

時間の経過により空間的距離は消え去り、西欧的な自由によって文化的境界も消え去った。もはやサイゴンとモンレアルを隔てるものは何もない。すべてが両者を近づけ、1つにする。(中略) だから、わたしはケベックとヴェトナムの狭間で書くのではなく、その両者とともに、両者の内部で書くのだ。それらの愛のなかで (Kim Thúy, 2016b, p. 8, 強調筆者)。

キム・チュイにとって、「ここ」と「よそ」の二項対立はこのようにして解消される。物心ついたときからカナダで暮らしてきた女性にとって、遠い記憶の中の故国と現実とのすり合わせはけっして容易ではなかっただろう。しかし、その体験を経たからこそ、新しい境地を開くことができたのではないだろうか。

## 2. ダニー・ラフェリエールにとってのハイチとモンレアル、そしてパリ

次に、ダニー・ラフェリエールの場合を見てみたい。前述のように、彼が

モンリアルに到着したのは1976年の夏のことだった。それから20年近く経った1994年に発表された『甘い漂流』は、彼が新しい都市で過ごした最初の1年間を回想した自伝的小説である。亡命同然で常夏の国から到着したラフェリエールは北国の町で何を見、何を感じたのだろうか？

話者の「ぼく」が空港に降り立って真っ先に見たものは、赤いミニスカートををはいた若い女性が恋人と抱擁している光景だった<sup>6</sup>。通りに出れば、ストーリーキングをする男が目に入るが、警官たちはそれを見て見ぬふりをしている(C14)。かつての68年世代やその後継者たちが相変わらず身体的・精神的自由を求めていた70年代の北米の様子がうかがえる。

住まいも、知人も、仕事もなく、空腹を抱えて公園をぶらつく話者に、「夜、／とても遅い時間に、／中華街に行けば、／裏通りで／食べ物を見つけられるよ」(C28；C訳33)と教えてくれる人がある。公園の鳩たちは、話者がレモン風味の鳩のおいしいレシピを知っているのではないかと不安げな視線を向けている(C40)。

しかし、ほどなく移民支援センターで支給された手当のおかげで部屋を借りることができ、移民・労働力省の仲介で、郊外にあるカーペット工場での夜勤の仕事も見つかる。工場があるのは、バスと地下鉄を何度も乗り継ぎ、その後さらに徒歩で20分という辺鄙な場所だ。彼はそこで夜通し、動物の皮をフックからはずして残っている肉を機械で削ぎ落とし、特殊な溶液に浸して次のフックにかける流れ作業をこなす。腕を機械に挟まれないためにはそのすべてを20秒以内に行わなければならない(C103-107)。

ともあれ、自立した青年はまもなく複数の異性と親しくなる。家主の娘、「心のための」友だち、「セックスのための」友だち、さらには、ときおり食糧の差し入れをしてくれて、本棚にある本のあいだに、別の本の購入資金として10ドル紙幣を忍ばせてくれるクリーニング店のおかみさんもいる。

こうして青年は70年代のケベック社会にゆっくりと溶け込んでいく。人種差別がないわけではない(C148-150)。しかし、広い心の持ち主たちもたしかに存在している。アフリカ風のディスコやバーに足しげく通い、アルジェリア料理店の店主から故郷への郷愁を延々と聞かされる場面などもある(C157)。それらのアフリカの題材に「放浪する若いヒッピー」、「神秘主義的菜食主義者たち」(C191)、あるいはレズビアン(C196)なども加わり、すでに間文化社会の兆しのある多様性に満ちたモンリアルが活写される<sup>7</sup>。

そのモンリアルで9年間におよぶ下積み生活を送ったラフェリエールは、

1985年、『ニグロと疲れしないでセックスする方法』という挑発的なタイトルの小説で文壇にデビューする。舞台はモンレアルで、主人公の« Vieux »<sup>8</sup>はサン＝ルイ広場に近いサン＝ドニ通りの部屋をブーバという相棒とシェアしている。ブーバは長椅子に横たわってコーランやフロイトの本をめくりながら日がな一日暮らす一種の隠者である<sup>9</sup>。2人の黒人青年の生活は「ミズ Miz」と呼ばれる若い女性たち——ミズ文<sup>リテラチュア</sup>学、ミズ自殺、ミズ洗練された女性、ミズ安全、ミズ俗物、ミズ神秘主義者等々——に彩られている。彼女たちはすべて英語話者<sup>スノッグ</sup>で、名門マギル大学<sup>アングロフォン</sup>の女子学生であることも多い。WASP女性 vs 黒人男性という構図は明白である。

『甘い漂流』では、到着したばかりの孤独な青年が町を歩き回り、必死に新しい場所を「観察」している様子がうかがえた。作品中の「現在」（1976年）から執筆時期（刊行は1994年）までに20年近い年月が経過していることもあり、話者を遠くから眺める作家の視線が感じられた。しかし、80年代のモンレアルを描いた『ニグロと疲れしないでセックスする方法』ではにぎやかな人間模様が繰り広げられ、登場人物たちは移民であるにもかかわらず北米の一都市での生活にどっぷりと浸かっている。彼らと作家自身との距離はきわめて近い。

ところが、ラフェリエールはその後、米国のマイアミに移住し、90年代はそこで家族と暮らすことになる。鳴り物入りでデビューしたあと、休息と静けさを求めたのだろうか。ハイチに残してきた母親に少しでも近づきたかったのかもしれない。モンレアルを克明に描いた作品で作家としてケベック社会に認知されたラフェリエールは、以後マイアミで、10巻から成る「アメリカの自伝」を執筆しはじめる。そこで喚起される場所は、幼年時代を祖母と過ごしたハイチのプチ＝ゴアヴ、その後、母や妹と暮らした首都のポルト＝ブランズ、そしてモンレアルやアメリカ合衆国など、南北アメリカ大陸全体にまたがり<sup>10</sup>、それらは小説のなかでも、作家の実人生においても、順に「ここ」となり、「そこ」となった場所である。興味深いことに、マイアミ自体はけっして小説に登場しない。「ぼくはマイアミにいる、ということとはつまり、どこにもいないということだ」、マイアミはモンレアルでも、ポルト＝ブランズでもなく、それらの郊外のようなものだ、と作家は言っている（Laferrière, 2010b, p. 194；小倉訳、2019、290頁）。マイアミはいわば、小説執筆のための真空地帯のようなもの、ということになるだろうか。

ラフェリエールは2002年にモンレアルに戻り、その後も執筆活動を続け

ている。モンレアルを舞台にした小説を書く一方で、2009年には、父親の訃報に接して久々にハイチに一時帰国するという設定の自伝的小説『帰還の謎』を発表して、モンレアル書籍大賞とメディシス賞をダブル受賞している。「ぼく」は、自分が物心ついた頃からニューヨークに亡命してほとんど記憶にない父親の魂を故郷に返してやるために33年ぶりにハイチに一時帰国し、父の生地であるバラデールまで旅するのだが、この旅で父親との関係は再構築できたのだろうか。そうでもあり、そうでないようでもある。小説は話者を「漂流」の思いのなかに置き去りにしたまま、突然終わる<sup>11</sup>。そして、ラフェリエール自身は2013年にアカデミー・フランセーズ会員になると、今度はパリとのあいだを往復するようになる…。

ラフェリエールの小説において場所の喚起はきわめて重要である。にもかかわらず、彼は自分がハイチの作家、カリブ海の作家、さらには、ケベック作家、カナダ作家、フランス語圏作家などと呼ばれるのを好まない。彼は場所をあらわすいかなる形容詞もつかない、ただの「作家」を自任する。その一方で、2008年、まだ1度も日本を訪れたことがない段階で、日本文学に関する豊富な読書体験だけから『吾輩は日本作家である』(Laferrière, 2008)を発表している。もちろん、ここで「日本作家」を自称しているのは厳密には作中の話者であり、ラフェリエール自身とは似て非なる人物なのだが、ラフェリエール自身もインタヴューのなかで次のように断言している。「日本人になりきるために、両親が日本人である必要も、日本に行ったことがある必要もない」(Laferrière, 2010b, p. 51; 小倉訳, 2019, 76頁)と。彼はこうしてアイデンティティの偽装をはかるのである。

この孤高の旅人があらゆるカテゴリー化からすり抜けながら目指しているのは、ある意味では、フランス語による「世界＝文学」なのではないだろうか。これは、サンマロの文学フェスティバル「驚異の旅人たち」の主催者であるミシェル・ル・ブリス(Michel Le Bris, 1944-2021)が2007年3月に『ル・モンド』紙に発表した宣言のなかで、「フランス語圏文学」に代わる横断的文学の概念として主張したもので、宣言にはラフェリエールも署名している<sup>12</sup>。ル・ブリスらが主張する「世界＝文学」は、フランスを揺るがぬ「中心」とし、「フランス語圏」を周縁化しようとする従来の文学的地政学を覆し、いたるところに「中心」、「主体」、「歴史」を見ようとするものだが、ラフェリエールもまた、彼なりの方法で「フランス語圏文学」に抵抗する。芭蕉の旅の道連れであろうとするラフェリエールは<sup>13</sup>、移住作家の「放浪」感

覚を逆手に取り、たえず旅をして「ここ」と「よそ」、現実と想像界を混交させ、書く行為と発話行為によって、自分が夢見たものを実現しようと目論む<sup>14</sup>。カテゴリー化されることを拒み、人間の現実<sup>14</sup>に直接降り立つために書く彼にとって、もはやいかなる境界も存在しないかのような大胆な身振りである。

### 3. イヴ・ボヌフォワにとっての「前の国」と「奥の国」

さて、ここで、冒頭で触れたイヴ・ボヌフォワに立ち戻りたい。われわれは、移住作家にとって、何らかの方法での「ここ」と「よそ」の和解が不可欠であることを理解した。それは、キム・チュイのように、もはや自らを両者の「狭間」に位置づけるのではなく、それらと「ともに」、それらの「内部に」位置づけることによって行われる場合もあれば、ラフェリエールのように、自身の出自を飛び越えて、どこでもない場所に身を置くことによってなされる場合もある。

一方、「現 前の詩人」ボヌフォワはフランス<sup>フランス</sup>に生まれ、生涯そこにとどまった。もちろん、外国を訪れる機会が多かったが、滞在はいずれも比較的短期のものであり、彼は表面的には移住者が経験するような問題とは無縁だった。しかし、1923年生まれの彼は、第二次世界大戦前後の実存主義の風土の中で自己形成しており、詩人としての生涯の最初の段階で、「今、ここ」にある「存在の現 前」<sup>フランス</sup><sup>15</sup>に加担するという決定的な選択をした。第1詩集『ドゥーヴの動と不動』の冒頭の詩において、彼は目の前にいる瀕死のヒロインの一刻一刻を倦むことなく描く。

私はお前を見ていた、テラスの上を走るのを、  
私はお前を見ていた、風に抗うのを、  
寒さがお前の唇の上で血を流していた。(Bonnefoy, 1953, p. 11)

しかし彼は、言葉を使って、死にゆく者の刻々と変化する様相をとらえることは不可能だとも感じている。というのも、物たちの「概念」にしか行きつくことができないように運命づけられている言葉が、「有限の」人間の移ろいゆく姿をとらえることは理論的にできないからだ。それゆえ、言葉と存在、詩的言語と存在の現 前<sup>フランス</sup>との「絶え間ない闘い」(Bonnefoy, 1980, p. 124)が繰り返されることになる。

もし、目の前にある生身の存在だけを救済すればよかったのなら、ボヌフォワは語たちに背を向け、「曰くいいがたいもの」に寄り添うだけでよかっただろう。しかし彼は偶然性に支配された現象の世界でばらばらに存在する物たちに満足していたわけではない。詩人として、語の使用・支持者として、直接的で「可感な」個々の存在を、ある種の奥行きと統一性の中で知覚することを望んでいた。彼は多くの旅をするが、それは人類の歴史の起源に立ち戻り、「物たちの表層においてではないところで実存している」(Bonnefoy, 1972, p. 12) 現前<sup>プレザンス</sup>、すなわち、「ここ」と「よそ」を和解させ、具体的であると同時に想像的な現前<sup>プレザンス</sup>に出会うためだった。したがって、彼が『奥の国』で、ニコラ・プッサン (Nicolas Poussin, 1594?-1665) 描く「水から救われたモーセ」<sup>16</sup> にかんがりのページを割いているのは故なしとしない。

周知のように、プッサンは画家としての生涯の大半をローマで過ごし、風景画の制作に取り組んだ。「自らのうちにあらゆる祈願、あらゆる葛藤を抱えながら、それらが宇宙の、そして精神の究極的な行為によって和解、再会、さらには奇跡をも生むことを願っていたプッサンは、長いあいだ、[...] 現実なるものの上流に回帰しようとしていたが、彼はまた、一つかみの土くれを集めて、これがローマだ、という人間でもあった」(Bonnefoy, 1972, p. 154)。彼にとってローマは、実存するものが経験する興亡を身をもって証言する帝国であり、都市だったのである。彼は、そのローマをうるおすテヴェレ河のほとりを歩いていたときに洗濯女たちを目にし、そのうちの1人が子どもを水浴びさせていたのを見て、「水から救われたモーセ」を描くことを思いついたといわれている。ローマを描いた前景には、色とりどりの布に囲まれた子どもが配され、エジプトの神話的風景を描いた遠景は、時間的にも空間的にもより深く、遠く、幾分ほんやりとしている。プッサンはこの2つの存在の在りようが幸福な結合を果たした風景画を構想したのである。ボヌフォワの野望は、この風景画と等価のものを詩的言語によって創造することであり、生涯をそれに捧げたといっても過言ではない。

### おわりに

以上、ケベックとフランスの3人の作家における「ここ」と「よそ」の問題を素描した。何らかの結論を導き出すにはより深い考察が必要だが、少なくとも次のことは明らかだろう。ケベックの2人の移住作家たちと「現前」<sup>プレザンス</sup>のフランス詩人は、見かけ上どれほどかけ離れていようとも、じつは3人と

も、場所をめぐる思索を自らの文学創造の根幹に据えてきた点で共通している。このことは、ボードレール (Charles Baudelaire, 1821-1867) が現代人の二重性に言及するために用いた「同時的な二つの祈願」という表現をボヌフォワが独自の文脈に移して使っている「二重の祈願」<sup>17</sup>と深く関わっている。すなわち、「今、ここ」で生きながら、過去や未来ともつながる「彼方」を思い描いたり夢見たりしたい、という相反する2つの願望である。その点、時空的境界を巧みに越えて「ここ」と「よそ」を共存させうる文学創造は、移住者にとってはもちろんだが、それ以外の書き手にとっても尽きることのない探求対象となりうるものなのである。

(おぐら かずこ 立教大学)

## 注

- 1 Chartier *et al.* (2004) や Lequin et Verthuy (1996) などを参照せよ。
- 2 ロマン主義以降の「よそ」の考察に関しては、2008年にフランスのスリジーでボヌフォワを招いて討論会が開催されている。Lançon et Née (2009) はその報告書で、Néeの前掲論文もそこに収録されている。
- 3 「真の場所」はボヌフォワが詩や詩論の中でしばしば用いる表現。詳しくは拙著 (小倉、2003、118-125頁) を参照されたい。
- 4 Thúy (2010, p. 7). 以下、同書への参照は、「R」の後に頁数のみ記す。
- 5 Vi はヴェトナム語で「微細な」あるいは「貴重な」という意味だが、その音は同時にフランス語の「生命 vie」をも喚起するだろう。名前の由来については Thúy (2016a, p. 28) 参照。以下、同書への参照は、原書の場合は「V」、邦訳の場合は「V 訳」の後に頁数のみ示す。
- 6 Laferrière (2012, p. 12). *Chronique de la dérive douce* の初版は1994年にVLB社から刊行されているが、2012年に増補改訂版が出版されているため、本稿ではそちらを参照する。以下、同書への参照は、原書の場合は「C」、邦訳の場合は「C 訳」の後に頁数のみ記す。
- 7 カナダ連邦政府のピエール・トルドー首相が多文化主義政策を打ち出したのは1971年。ケベック州では1975年創刊の文芸誌『漂流』(*Dérives*) が、1979年以降「間文化的雑誌」を標榜するようになる。なお、ここまでの『甘い漂流』の紹介については、拙著 (小倉、2021) も参照されたい。
- 8 立花訳では「ジイ」。「年老いた」という形容詞であると同時に、「老人」を意味する名詞でもあり、親しい間柄の人を呼ぶときには年齢に関係なく使用され

- る。ラフェリエールの絵本では、主人公は *Vieux os* (古い骨、長生きの意) と呼ばれていて、「ヴュー」または「ヴューズ」という呼称がもつ響きの強さも重要だと考えられる。
- 9 Laferrière (2010a, p. 25). 本書の初版は Lanctôt 社から 1985 年に出版されているが、以下、同書への参照は 2010 年版による。
  - 10 「アメリカの自伝」は『ニグロと〜』(1985 年) から『<sup>カツオドリ</sup>狂い鳥の叫び』(2000 年) まで書き継がれる一連の作品の総称である。各巻の舞台とテーマについては、Vasile (2008) の詳細な分析を参照のこと。
  - 11 Laferrière (2009)、および小倉訳 (2021) 参照。
  - 12 2007 年 3 月 16 日の *Le Monde des livres* に発表された本宣言 « Pour une littérature-monde en français » は、Gauvin (2010, pp.169-176) にも再録されている。また、この宣言に署名した多くの作家たちが *Le Bris et Rouaud* (2007) に寄稿している。構造主義以降、テキスト内に留まり、外界に指示対象をもたなくなったフランス文学が勢いを失い、2006 年の主要文学賞の大半が海外のフランス語作家に授与された出来事をうけて、従来の「フランス語圏文学」に代わる概念として、フランス語による「世界=文学」が提唱された。
  - 13 『吾輩は日本作家である』、*Sur la route avec Bashō* (Laferrière, 2021) など、ラフェリエールの作品にはしばしば芭蕉が登場し、彼がこの旅の俳人に多大な関心を抱いていることが読み取れる。
  - 14 たとえば、『ニグロと〜』の中で作家デビューを目指す主人公は『すけこましニグロのパラダイス』という小説を書いているが、それが完成してボンバルディエ夫人が司会をする『白黒つけよう』というテレビ番組に招待される場面がある。このフィクションは『ニグロと〜』出版後すぐに現実のものとなり、ラフェリエールは番組と呼ばれる。
  - 15 実存哲学における「実存」や「現存在」に近い用語であるが、神学的な意味合いも含まれるこの語のボヌフォワによる使用については、小倉 (2003, 230 頁) を参照されたい。
  - 16 Collection Louvre, <https://collections.louvre.fr/en/ark:/53355/c1010062435> (2022 年 3 月 19 日閲覧)。Bonnefoy (1972, pp. 112-113) に再録。
  - 17 ボードレール『赤裸の心』参照。ボヌフォワの「二重の祈願」については、Bonnefoy (1977, p. 282) 参照。

## 参考文献

- BONNEFOY, Yves (1953) *Du mouvement et de l'immobilité de Douve*, Mercure de France.  
— (1972) *L'Arrière-pays*, Albert Skira.

- (1977) *Le Nuage rouge*, Mercure de France.
- (1980) « La poésie française et le principe d'identité », *L'Improbable*, Mercure de France.
- CHARTIER, Daniel, Véronique PEPIN et Chantal RINGUET (dir.) (2004) *Littérature, immigration et imaginaire au Québec et en Amérique du Nord*, L'Harmattan.
- GAUVIN, Lise (dir.) (2010) *Les littératures de langue française, à l'heure de la mondialisation*, Hurtubise.
- LAFERRIÈRE, Dany (2008) *Je suis un écrivain japonais*, Boréal. [立花英裕訳 (2014) 『吾輩は日本作家である』藤原書店]
- (2009) *L'énigme du retour*, Grasset. [小倉和子訳 (2011) 『帰還の謎』藤原書店]
- (2010a) *Comment faire l'amour avec un nègre sans se fatiguer*, Le Serpent à Plumes. [立花英裕訳 (2012) 『ニグロと疲れないでセックスする方法』藤原書店]
- (2010b) *J'écris comme je vis*, Boréal. [小倉和子訳 (2019) 『書くこと 生きること』藤原書店]
- (2012) *Chronique de la dérive douce*, Grasset. [小倉和子訳 (2014) 『甘い漂流』藤原書店]
- (2021) *Sur la route avec Bashō*, Grasset.
- LANÇON, Daniel et Patrick NÉE (dir.) (2009) *L'Ailleurs depuis le romantisme : Essais sur les littératures en français*, Hermann.
- LE BRIS, Michel et Jean ROUAUD (dir.) (2007) *Pour une littérature-monde*, Gallimard.
- LEQUIN, Lucie et Maïr VERTHUY (dir.) (1996) *Multi-culture, multi-écriture : la voix migrante au féminin en France et au Canada*, L'Harmattan.
- NÉE, Patrick (2009) « Yves Bonnefoy déconstructeur de l'Ailleurs », dans LANÇON, Daniel et Patrick NÉE (dir.) *L'Ailleurs depuis le romantisme : Essais sur les littératures en français*, Herman, pp. 471-496.
- 小倉和子 (2003) 『フランス現代詩の風景』立教大学出版会。
- (2021) 『記憶と風景：間文化社会ケベックのエクリチュール』彩流社。
- THÚY, Kim (2010) *Ru*, Liana Levi. [山出裕子訳 (2012) 『小川』彩流社]
- (2016a) *Vi*, Liana Levi. [関未玲訳 (2021) 『ヴィという少女』彩流社]
- (2016b) « Écrire entre le Vietnam et le Québec », 日本ケベック学会全国大会 (2016年10月8日) 「発表要旨」、pp. 8-9.
- VASILE, Benjamin (2008) *Dany Laferrrière : l'autodidacte et le processus de création*, L'Harmattan.